

魅了が解けた世界では

登場人物紹介

クロノス・フォン・ ネオシスト

ネオシスト王国の王太子。
腹黒い性格をしているが、妻には一途。

シャロル・レディーナ・ ネオシスト

ネオシスト王国の王太子妃。
真珠をこよなく愛する美女。

ヴァン・サンディーロ

サンディーロ家の次男でセレスの夫。
様々な魔道具を生み出した天才。

エリオット・シャル・ ロイヤット・ボルビアン

ボルビアン国の王太子。
5年前に幼馴染であった
婚約者を追放し、婚約破棄をした
過去をもつ。

ジュリエナ・ロイヤット・ ボルビアン

ボルビアン国の王太子妃。
自由奔放で無邪気な性格をしている。
幼い頃は虚言癖があるといわれていた。

セレンティーヌ・ド・オグノア

オグノア公爵家の長女でエリオットの元婚約者。
類まれなる発想力を持つ才女。婚約破棄ののち、
平民の「セレス」としてネオシスト王国で暮らしている。

目次

魅了が解けた世界では

7

番外編 隣国の王太子夫妻は悪役令嬢を逃さない

251

魅了が解けた世界では

第一章 偽りの幸せは終わりを告げる

——とある公爵令嬢がボルビアン国から国外追放されてから、五年の月日が流れていた。

山々に囲まれたボルビアン国は一年のうち三分の一が雪で覆われ、貿易が盛んな他国と比べると閉鎖的であった。周辺諸国のように後世へ伝えられるような伝説もなければ、魔法や魔術は遥か昔に廃れ、その存在は文献で残っているだけだ。その一方で独自の文化が発展し、様々な職人が生まれた。特に武器や家具の装飾技術は、他国の職人がいくら真似しようとしても真似できない代物だ。他国が羨む文化を持ちつつも、ボルビアン国は交易を最小限に留めていた。著しく繁栄することもない、衰退することもない……。世襲君主制によって国王が国を統治し、貴族は与えられた領地を守り、平民は不自由なく暮らしていた。

至って平凡で穏やかな国だ。

そんな国に衝撃が走ったのは今から五年前の事だった。

当時、とある公爵令嬢が、第一王子の婚約者でありながら恋に溺れ、嫉妬に狂い、自らの婚約者

と仲良くする下級貴族である男爵令嬢を虐げ、さらには殺害まで企てた。

それら全ては白日の下に晒され、彼女は国外追放となった。

次期皇太子妃となる筈だった公爵令嬢の悪行は、貴族だけでなく多くの民に衝撃を与え、大きな混乱を招いたが、近頃は少しずつ落ち着きを取り戻しつつあった。

国を揺るがす大スキャンダルは今も尚、社交界で話題になる。

その度に誰もが公爵令嬢を非難し、嘲笑い、消えてくれたことに感謝していた。話される内容はどれも似たり寄ったりで、彼女を擁護する声は聞こえてこなかった。

彼女は稀代の悪女として、ボルビアン国の歴史にその名を刻んだ。

——一方、国を混乱と恐怖に陥れた公爵令嬢のスキャンダルの裏で、もう一つ語り継がれる物語があった。ボルビアン国唯一の王子と男爵令嬢の、身分違いのロマンスだ。

ボルビアン国には十五歳から十八歳までの貴族の子供が通う学園があった。

しっかりとした教養を身に付け、社交界に出ても恥じない礼儀作法とダンスを学ぶ。同時に、貴族の一員として顔や名を売るのだ。生徒たちの中には横の繋がりを広げる者もいれば、将来の伴侶を探す者もいた。

まさに社会の縮図だ。

学園は、身分に関係なく誰でも自由に学ぶことを方針に掲げていた。

しかし、彼らは当初から他の生徒たちと違っていた。

国王の一人息子である王子を筆頭に、彼の婚約者である公爵令嬢。

宰相の息子である侯爵息子と、王国騎士団総長の息子である伯爵息子と、その婚約者である伯爵令嬢。彼らはいずれこの国の頂点に立ち、王城から群衆を見下ろす存在だった。

他の生徒にとっては近づくことすら恐れ多い彼らだったが、その均衡が崩れたのはいつからだろう。

とある男爵令嬢が、王子と親しげに喋っている姿がしばしば目撃されていた頃からか。

二人は人目も憚らず一緒に過ごしており、妙な噂が流れるのは時間の問題だった。

けれど、事態は思わぬ方向に動いた。

王子の婚約者である公爵令嬢が、自らが持つ権力を行使して男爵令嬢に酷い仕打ちを繰り返したのだ。

王子や、他の者はこぞって公爵令嬢を批判した。幼い頃から仲が良かった王子と公爵令嬢の間には亀裂が走り、二人の距離はどんどん離れていった。

加えて、遅れて入学してきた公爵令嬢の弟ですら彼女を見限り、王子と共に男爵令嬢を守った。王子と男爵令嬢は誰の目から見ても相思相愛で、身分違いのロマンスがさらに周囲を沸かせた。そして、事件は起こった。

男爵令嬢が暴漢に襲われたのだ。犯人はその場で捕らえられ、取り押さえられながらこう口走った。

「公爵令嬢に頼まれてやった」と。

公爵令嬢は知らないと言いつつ、彼女の味方をする者は誰もいなかった。

家族や兄弟、長年一緒にいた婚約者からも見放され、公爵令嬢は国外追放となった。

国を出ていく彼女の姿はどこか潔く、その姿勢は最後の最後まで崩れることはなかったという。

——それから五年が経った。

まさか、悪女と呼ばれた公爵令嬢の起こした事件の結末が、隣国からやって来た一人の天才魔導師によって覆ることになるとは誰も思わなかっただろう。

とある一つの魔道具で、物語は急展開を迎えることになった。



王宮の一角。

男は隣国の使節団と謁見を済ませ、仕事が溜まった執務室に戻ってきた。父親が病に臥してから

処理しきれない仕事が続いてきている。

襟や袖口に繊細な刺繍の入った青い上着と白いトラウザーズの組み合わせは着る者を選ぶが、男は堂々と着こなしていた。肩から斜めに掛かった赤いサッシュと金糸の飾緒の輝きから、男の立場が窺える。美しく整った美貌もまた血筋だろう。

従者が部屋の扉を開けると、ワインレッドカラーの上品な絨毯の上を小さな男児が走り回っている様子が見えた。傍らでは一人の女がお茶を嗜んでいる。何とも優雅な光景だ。

「ご機嫌よう、エリオット」

「ちちうえー！」

女はソファから立ち上がり、男に声をかけた。その脇から、男児が飛び出して男の足元に抱きつく。

男は男児を抱き上げ、ふつくと膨らんだ頬に口付けた。両者とも黄金色に輝く髪に、宝石のようなエメラルドグリーン色の瞳。絵になる父子だった。

「もう、リオルったら」

女はクスクスと笑いながら、男に近づいてその頬にキスをした。だが、いつもなら返ってくる口付けはなく。女は不思議に思って首を傾げた。

すると、男は男児——息子であるリオルに向かって口を開いた。

「執務室は遊び場じゃないぞ、リオル」

「いいじゃないですか。最近、食事と一緒にとれてませんし」

冷たくされたことに機嫌を損ねた女は、愛らしい頬をぷくぷくと膨らませた。男は息子を抱いたままソファーに腰を下ろす。女はその隣に我が物顔で座った。

男は息子を咎めつつ、様々なことを呑み込んで女に向き合った。女——自らの妻に伝えるべきもつと重要な話があったからだ。

「隣国のネオシイスト王国から使節団が来た」

「そうですか。それは大変でしたね」

夫を労う妻としては申し分ない。

だが、彼女の持つ肩書きはごく普通の、どこにでもいる妻とは訳が違った。

男の名は、エリオット・シャル・ロイヤット・ボルビアン——ボルビアン国の王太子である。

そして女は、ジュリエナ・ロイヤット・ボルビアン——エリオットの妻で、王太子妃だった。

話を戻せば、なぜ隣国から使節団がやって来たのか。

その原因はジュリエナにあった。

閉鎖的なボルビアン国だが、隣国であるネオシイスト王国とは年に数回、数少ない交流が続けてきた。大国であるが故に無視することができなかったのだ。

それに、各国の代表が多く集まるネオシイスト王国の祝宴に参加すれば、わざわざ他の国に足を運ばなくとも一堂に挨拶ができる。

——そういえば彼女とも一度だけ訪れたことが……

エリットは一瞬だけ浮かんできた光景にハッと、薄い唇を噛んだ。

エリオットが立太子するまで、他国との公務は国王と王妃が担っており、隣国を訪れた回数はそれ程多くはなかった。

だからだろう、記憶として残っている思い出は少なく、一つひとつが今でも鮮やかだ。

そして昨年、エリオットは初めてジュリエナを連れてネオシイスト王国を訪問した。妻であり、王太子妃であるジュリエナを紹介する為だ。

しかし、こともあるうかジュリエナは、ネオシイスト王国の特産品に難癖をつけるという失態を犯してしまったのだ。

ジュリエナには思ったことをそのまま口にする癖があった。自国なら許されたかもしれないが、他国ではそうとは限らない。それにあの時は品物を見せてくれた相手が悪かった。特産品を運んできたのはネオシイスト王国の王太子妃だった。

隣国との間に摩擦が生じてはいけなと、エリオットは帰国してからすぐに謝罪の手紙とお詫びの品を贈った。そして、今回訪問してきた使節団はその返答を持ってきたのだ。今後とも良好な関係を続けていこう、と。

その場に居合わせた者たちはホッと胸を撫で下ろしたことだろう。ネオシイスト王国だけには睨まれたくない。

「君は王太子妃として良くやってくれている。だが、他国との外交はとても気を遣わなければならない。何気ない失言で大きな争いを生み兼ねないんだ」

「私には難しいですわ」

「……そうか、分かった。これから外交の公務は私とハルミンで行うことにしよう」

エリオットは有能な右腕の名を出し、溜め息混じりに答えた。

ジュリエナの失態が大事にならなかったのは、優秀な側近が同行していたからだ。彼がジュリエナの代わりに謝罪し、隣国の王太子に掛け合ってくれたおかげだ。女性同士の交流と思って目を離すべきではなかった。

元々、男爵令嬢だったジュリエナは、王族であるエリオットと婚約する為にとある公爵家の養女となった。幼い頃から王妃となる為に教育を受けてきた前婚約者とは異なる。

——なぜ、今頃になって彼女の顔が浮かんでくるんだ。

エリオットはぐつと堪え、息子の髪を撫でた。柔らかな金色の髪が指の間をすり抜けていく。疲れているせいか、今日はいつもとより苛立っていた。愛する妻の態度や言葉の一つひとつが癪に

障った。

その時、ジュリエナが突然恥ずかしそうに笑いながら体を寄せてきた。甘い香りが鼻孔をくすぐる。明るい茶色の髪に、黒曜石の瞳。豊満な胸の乗った女性らしい体躯。

学園に通っていた頃、男爵令嬢でありながら自由奔放な彼女に誰もが夢中だった。くるくる変わる表情に、庇護欲をそそる声と仕草。あの頃と変わらない。

王太子妃になってもジュリエナは、ジュリエナだった。

「ねえ、エリオット。そんなことより、王太子妃として肝心なことはもつと他にあるじゃないですか？」

言葉遣いも、学園の頃のままだ。

婚約してから未来の王妃として教育が始まったものの、数カ月もしない内に投げ出した。

なのに、誰も彼女を咎めなかった。皆、ジュリエナに甘かった。

「リオルが、弟や妹が欲しいと毎日のようにせがんでくるの」

赤い紅のついた唇を持ち上げて、ジュリエナはエリオットの腕に自らの腕を絡ませてきた。いつもだったら嬉しいそれも、ドレスや行動がまるで夫婦のようだと興醒めする。

姿も、声も、笑顔も、昨日までと変わらない妻なのに。

ジュリエナとは学園で出会った。二人は同じ学年で、クラスメイトだった。

とはいえ、男爵令嬢のジュリエナと王子であるエリオットの間には明確な身分の差があり、最初

は挨拶を交わす程度の関係だった。

だが、エリオットの親友がジュリエナと親しくなったことをきっかけに、彼女の存在を認識するようになった。

それからだ。教室以外で、ジュリエナと偶然鉢合わせることが増えた。そうやって何度も繰り返し会っている内に、次第に二人の距離は近づいていった。

婚約者がいる身でいけないと分かっているにもかかわらず、下級貴族とはいえ自身を軽んじることなく、自由でひたむきに頑張るジュリエナに心を奪われるのは時間の問題だった。

いつしか、彼女に深い愛情を抱くようになった。

だが、この恋は諦めなければいけない。この国唯一の王位継承者として、幼い頃から共に歩いてきた婚約者はもちろん、国を更に良くしたいこうと誓った仲間の為に。

けれど、それらはジュリエナの告発で一転した。

「実は……殿下の婚約者に、虐められているのです」

ジュリエナは泣きながら訴えてきたが、エリオットは最初その言葉を信じる事ができなかった。婚約者である公爵令嬢のことは、幼い頃から共に過ごしてきた自分が一番よく知っている。そんなことをする女性ではない。

けれど、もしジュリエナの言葉が本当なら、彼女が酷い目に遭っていることに激しい怒りを覚えた。エリオットは直ちに彼女の近辺を調べさせた。

すると、複数人からの聞き込みから、ジュリエナの言葉は真実であると分かった。

エリットは報告を受けたその日に公爵令嬢の元を訪れ、ジュリエナに対する虐めをやめるよう忠告した。公爵令嬢は否定したが、エリオットはジュリエナを信じた。

結局、その後も公爵令嬢は虐めを止めず、最後には平民の男にジュリエナを襲わせた。万が一の為、ジュリエナの側に騎士を張り付けておいて良かった。

その場で取り押さえられた暴漢の証言により、公爵令嬢は国王や多くの貴族が出席する学園の卒業パーティーで断罪された。

エリオットの母親である王妃は実の娘のように可愛がっていた公爵令嬢を最後まで庇ったが、国王は頑として聞き入れず彼女を国外追放にした。王妃は嘆き悲しみ、心労で倒れて今から三年前に亡くなった。

愛する妻を失い、王妃の分まで公務を行っていた国王も数週間前に倒れ、今では寝たきりの状態だ。稀代の悪女となった彼女は、一体どこまで国の者たちを苦しめれば気が済むのか。

——あれほど一緒に過ごしてきたのに……

エリオットは唇を噛んで悔しさを滲ませた。一体いつから公爵令嬢は人を傷つける性格になってしまったのか。どうしてその本性に気づけなかったのか。

しかし、今となつては良かったと思っている。彼女が王太子妃となり、後に国母になっていたら大変だった。

こうして、悪魔に魂を売った前婚約者は追放され、エリオットは愛しい女性と可愛い息子を手に入れた。これ以上の幸福はない。

——そう思うことで、現実から目を逸らしてきたのかもしれない。

エリオットは左手首に焼けるような熱を感じて我に返った。

「……？」

反射的に視線を落とすと、左手首にある銀のブレスレットが青く光っていた。

これは先ほどネオシースト王国の魔導師が献上してきた品物だ。どんな毒や呪いも無効化できる魔道具だと聞かされた。

例えば毒に侵された時は毒の文字がブレスレットに書かれ、体を巡る前に毒の効果がなくなるといふ。隣国では王族や貴族なら誰でも身につけていると教えられた。

そして、今。

ブレスレットに浮かんできた文字に、エリオットは血の気が引いた。

「エリオット……？」



ジュリエナが声をあげる。

——なぜだ。

どうして、よりにもよって『それ』なんだ。

エリオットはリオルを床に下ろし、その場で立ち上がってジュリエナを見下ろした。

「どういふことだ。君は一体……？」

そんな筈はない。

違う、違う、と自分自身に言い聞かせた。

けれど、どこかで納得している自分がいた。

すでに心と体のバランスが取れなくなってきたのだろう。プレスレットがなくてもエリオットの心はとつくに悲鳴を上げていたのだ。

「——つ、王太子妃を部屋に連れていけ！」

エリオットが執務室に控えていた護衛の騎士に命じると、騎士は戸惑いながらも命令に従った。

突然のことにジュリエナは目を見開いてエリオットを見上げたが、彼の目は氷のように冷たかった。

「ちよ、なにっ!? どうして、エリオット、エリッ……！」

二人の騎士に両腕をとられ、引き摺られるようにして執務室を出ていくジュリエナを見送る。エ

リオットの足元には、それを不安そうに見つめる幼い緑色の瞳があった。



遡ること数時間前。

ネオシイスト王国の魔導師を名乗った男は、紺色のフードを深く被り、王太子であるエリオットの前に銀色のプレスレットを差し出した。

こちらに差し出された男の手は、革の手袋によって指先まで隠され、年齢どころか肌の色さえ分からぬ。声から察するに、まだ若い男のようだが、魔導師というだけあって性別も定かではなかった。

声帯だつて自在に変えられるチョーカーを見せられたばかりだ。何を信用すればいいか分からない。

ただ、男が差し出してきた魔道具には興味が湧いた。ボルビアン国では、椅子職人によって新しい形の椅子は生まれても、見たこともない品物が生まれることはなかった。

そうして受け取った魔道具は画期的なもので、エリオットは王国を訪問した時にも感じた時代の遅れに再び気づかされた。使節団から要求された貿易の拡大も視野に入れるべきだろうか。

大きな事件から数年、国は落ち着きを取り戻してきた。この国の王太子として何が最良か、選択

を求められている気がした。

様々なことに考えを巡らせながら執務室に戻ると、妻と息子がいた。
この二人の為に。

そう思っていた矢先だった……

王太子が王太子妃を閉じ込めたと報告を受けて、一人の青年がエリオットの執務室に飛び込んできた。

「失礼致しますっ！」

ジークレイ・キャスナー。王国騎士団総長を務める伯爵の子息であり、王宮の警護と警備を任されている第四部隊の隊長である。

燃えるように逆立った赤い髪に、茶褐色の瞳。騎士だけあって、赤い軍服の上からでも引き締まった肉体が分かる。逞しい腕を揺らして、大股で歩いてくるジークレイはなかなか迫力があつた。

「貴方も来ましたか……」

執務室にはすでに王太子のエリオットと、彼の右腕である青年が佇んでいた。

ハルミン・ドルート。三年前に両親を馬車の事故で失い、僅か二十歳という若さで侯爵の爵位を受け継ぐことになった青年だ。彼が両親の葬式で涙を流すことなく気丈に振る舞った姿が今も脳裏に焼き付いて残っている。父親は宰相を務めており、彼自身も学園時代から王宮で働いていた秀才だ。

深緑色の長く伸びた髪を一つに束ね、同色の瞳には銀縁の眼鏡を掛けている。金色の刺繍が入った白い長衣に、茶褐色の外套を羽織った姿は文献などに出てくる魔法使いのようだ。

目を細めて相手の動向を探るのは彼の癖で、子供の頃は少女に見間違われるほど愛らしかったのに、今ではすっかり神経質な風貌になってしまった。

「どういうことか説明してくれ」

ジークレイとハルミンはお互いに視線を交わし、執務室の椅子に座ったエリオットに目をやった。室内には彼ら三人だけだ。エリオットがすでに人払いをして、側近であり親友でもある二人を待っていたのだ。

「話をする前に、二人にもこれを付けてほしい」

「これは……？」

「ただのブレスレットではなさそうですね」

エリオットは机を挟んで向かいに立つ二人の前に、銀のブレスレットを置いた。

「ああ、その通りだ。これはネオシイスト王国の魔導師が作った魔道具で、毒や呪いを防ぐものだ」

「毒や、呪いを……？」

そんなことが可能なのかと驚く二人を前に、エリオットは魔導師から教えられた効果を話して聞かせた。普通ならただのアクセサリーに過ぎず、魔道具ということも忘れてしまうのだという。だ

からこそ、相手に気づかれず身を守ることができるのだ。

現にハルミンもジークレイも、それぞれブレスレットを腕に通したが変わったところは何もない。そして、エリオットは深い溜め息の後、話を続けた。

「このブレスレットによって私が防いだ呪いは、魅了だ」

「なっ!？」

「ジュリエナは私に魅了の呪いを掛けていた。本人にその意思があったのかは調査中だが、間違いなくあれは呪いの一種だ」

——『魅了』。

その昔、恋に溺れた魔女が相手の男性を自分のものにしようと作り出した呪いだ。相手を自分に惚れさせ、意のままに操る強力な呪いで、貴族なら誰でもその存在を知っている。学園でも教えられた事だが、実際どういうものか知る者はおらず、物語だけの話だと思って頭の片隅に追いやられた呪いの一つだ。

なのに、王太子の口から魅了という言葉が発せられ、その犯人が妻である王太子妃だなんて。

二人は驚愕して目を見張った。

「……なんということを」

「そんな馬鹿な！ きちんと確認したのか!? ブレスレットが間違いつてことも!」

「何度も確認したさ……。彼女の傍では常に魅了の文字が浮き出て光る。……私だって信じたくはない」

額を押さえるハルミンに対し、ジークレイは囁みつくような勢いでエリオットに詰め寄った。王族の護衛騎士を指揮しているジークレイにとって、護衛対象であった王太子妃が犯人だとは信じ難い話だろう。

「……気づかずにいたら最悪、彼女の傀儡になっていましたね」

「言葉に気を付けろ、ハルツ!」

ジュリエナを咎める発言に、ジークレイはハルミンの胸倉を掴んで鋭く睨み付けた。

そう、誰もがジュリエナに夢中だった。

皆が彼女に恋をし、最後は王太子との仲を応援し、王太子妃になったことを喜んでくれた。

「——やめろ、ジーク。ハルミンから手を離せ」

冷静なエリオットの声にジークレイは舌打ちして、ハルミンから手を離れた。ハルミンは乱れた服装を直し、ズレた眼鏡を中指で押し上げた。

「それで、一体いつから魅了を?」

「……分からない。もし、出会った時からだとしたら」

「おい、それって……」

「そうですか。それでは五年前の事件も調べ直す必要がありますね」
ハルミンの放った言葉に、エリオットとジークレイは息を呑んだ。

もし、もしもだ。

仮に五年前の事件を調べ直して真相が覆ったら、どうなるのだろうか。国を混乱に招いた事件が今頃になって違っていたと分かったら。

……だからといって、調べない訳にはいかない。エリオットは重苦しい空気の中、口を開いた。

「早急に調べてくれ。もし、あの事件が虚偽だとしたら……」

自分は、この国は、取り返しつかないことをしてしまったことになる。

エリオットが苦渋の表情を浮かべたのを見て、ハルミンとジークレイは何も言えず、彼の命令に従うしかなかった。



悪女と呼ばれ、国外に追放された公爵令嬢——セレンティーマ・ド・オグノアは、オグノア公爵家の長女だった。ボルビアン国で最も高貴な貴族令嬢であり、生まれて間もなくエリオットの婚約者となったのだ。

それから二人は、ずっと一緒に育ってきた。

お互いを、親友であり、恋人であり、兄妹であり、夫婦であり、喧嘩友達である、と言って周囲を笑わせたことがある。誰よりも深い絆で結ばれていた筈だった。

執務室の机に重ねられた報告書に一枚、一枚丁寧に目を通していったエリオットは表情を曇らせた。

五年前の出来事とはいえ、大きな事件だけに覚えている者が大半だ。

なのに、学園時代に関わりのあった者達に魔道具のプレスレットを付けて改めて証言を求めると、一様に覚えていないと口を揃えた。記憶がなくなったのではない。ただ、それまでジュリエナを擁護していた声は一転し、何も知らないと言りは始めたのだ。

正直、話にならなかった。それでは五年前の証言はなんだったのか。

同時に、確かなことが一つだけあった。

当時、男爵令嬢だったジュリエナを公爵令嬢が虐めたという確固たる証拠は、何もないということだ。

公爵令嬢は婚約者として、エリオットに纏わりつくジュリエナを注意することはあっても、ジュリエナが泣きながら訴えてきたような酷い虐めがあったという事実は見つからなかった。

結果的に、ジュリエナの証言だけで公爵令嬢は立場を追われたのだ。

エリオットもまた、ジュリエナの言葉を信じた。信じなければという気持ちにさせられた。婚約者であった公爵令嬢を何度も咎め、心にもない言葉を浴びさせ、彼女を窮地に追い込んだのだ。

「私は、一体なにを……っ」

魅了に掛かっているにも記憶はある。思い出せば思い出す程、己の愚かさを痛感する。エリオットは片手で顔を覆い、肩を落として項垂れた。

「失礼致します。殿下、例の報告書をお持ちしました」

青い顔で項垂れるエリオットの元へ、もう一つの報告書を携えたハルミンが訪れた。

エリオットの前に立つや否や、ハルミンは険しい顔をさらに顰めて言った。

「顔色が悪いですね。睡眠もろくに取れていないのでしょうか」

「この状況下で眠れるわけがない」

「貴方に倒れられては意味がありません。国王陛下が病に臥している以上、動ける王族は貴方しかいないのです」

「……分かつている」

親友の小言に、エリオットは嘆息した。ハルミンの言う通りだ。国王の代理まで務めている自分が倒れてしまつては、業務は瞬く間に滞ってしまう。

エリオットは椅子から立ち上がり、ソファアに移動した。

ハルミンもまた、エリオットの向かい側に腰を下ろした。

「早速ですが、こちらが王太子妃を襲った暴漢の報告書になります」

複数枚になるかと思つた報告書は、たったの一枚だ。テーブルに置かれた紙を持ち上げて目を通

すと、緑色の目が揺れた。

「……奴は、死んだのか」

「ええ。国外追放された日に、国境を越えた所で物取りに襲われたようです」

「なんだと？」

ボルビアン国には死刑制度がなく、国外追放が最も重い刑となっている。

大罪人は二度と入国できないよう手続きがされ、それが済めばほぼ無一文で国境の外に追い出される。当然、馬車もなければ馬もない。ひたすら歩いて移動するしかなかった。運が良ければ生き抜けるだろうが、犯罪者のその後を知る者は誰もいない。

「……口封じのために殺されたのか？」

「それは分かりませんが、偶然にしてはタイミングが良すぎるかと」

「後々証言されては困る者の犯行、か」

苦々しく口に出すと、エリオットは額に手を当てた。

仮に生きていたところで、再び証言してくれるとは限らない。彼もまた都合よく使われたのだらう。

今になって思えば、なぜ暴漢の放った言葉を鵲呑みにしたのか。きちんと調べもせず、裏も取らず、大勢が集まる中で長年一緒にいた婚約者を断罪してしまった。

「王太子妃のご様子はいく？」

「……相変わらずだ。魅了のことは『知らない、やっていない』と言い張るばかりで、認めようとはしない。そればかりか『そんな設定はなかった』と意味の分からないことを口にするようになってきた。今はジークが見張っているが」

「左様ですか。王太子妃が養子に入る前の男爵家を調べましたが、疑わしいところは何も出てきませんでした。ただ、気になることが一つだけ」

「なんだ？」

「男爵家に古くからいた使用人に話を聞くと、王太子妃は子供の頃は虚言癖きょげんへきがあったということです。成長されてからはそのようなこともなかったようですが」

「虚言癖か……」

ジュリエナは今、王族専用の牢屋ろうやがある北側の塔に幽閉ゆうぺいされていた。

表向きは精神の病に侵されたジュリエナを、治療の為に入れていることになっている。

それもいつまで続くのか。

整った顔を歪ませて頭を悩ますエリオットに、ハルミンはおもむろに訊ねた。

「肝心の証人は消えましたが、いかがしますか？」

昔から表情の乏しいハルミンは顔色一つ変えず、淡々としていた。

両親を失った時でさえ、涙を零すこともなかった彼のことから当然かもしれないが。

訊ねられたエリオットは乾いた唇を数本の指先でなぞり、逆に訊き返した。

「……公爵令嬢は、セレンティーンヌは、冤罪えんざいだと思うか？」

本当は訊ねる必要もなかった。己の中ではすでに答えが出ている。それでも口にしたのは、親友に背中を押してもらいたかったのかもしれない。

当然、エリオットの気持ちに気づいたハルミンは、眼鏡を押し上げて伝えた。

「証拠がない以上、明確に言い切ることはできません。ですが、今なら……私はセレンティーンヌ様の言葉を信じるでしょう」

強い眼差しで迷いのない言葉を放った親友に、エリオットは静かに「そうか」と呟いた。気持ちに代弁された気分だ。沈んでいた胸が少しばかり晴れていく。

エリオットが僅かに頬を綻ほじろばせると、ハルミンは見計らったように別の報告書を差し出してきた。

「それから、こちらを」

ハルミンには珍しく歯切れが悪かった。手渡された報告書は先程のより多く、分厚い。パラパラと捲めくり始めると、エリオットの手が止まった。

「……断罪の後、王太子妃に危険が及んではいけないと思います、追放後も彼女の足取りを追っておりました」

「……セレンティーンヌはネオシイスト王国にいるのか」

報告書には追放された公爵令嬢の情報が生い立ちから数週間の情報まで、事細かに書かれていた。そして今、彼女はそれほど離れていない場所——隣国であるネオシイスト王国にいる。

近頃、隣国の名を耳にすることが多いせいか、知らないところで誰かの掌てのひらの上で踊らされているような気がしてならない。

そうだとしたら一体誰が、何の為に。

だが、今は優先するべきことが他にある。

「セレンティーヌ様は現在は平民として、王都の市井しせいで暮らしております」

「生きていたのか。そうか、それは……」

良かった、と言っているのか。

追放を言い渡したのは国王だが、他の女性に心を奪われ、断罪し、追い詰めたのは自分だ。幼い頃から共に過ごし、支え合ってきたのに。

エリオットは報告書を握り締め、ハルミンに命じた。

「ジークとユリウスを呼べ。今後について話し合う必要がある。それからネオシスト王国の使節団に滞在の延長を。同時に、こちらからも派遣はけんする使者の同行も頼んでくれ」

「――仰せのままに」



銀色に輝くその屋敷やしきは、別名「銀水晶の宮」と呼ばれている。先々代の王女殿下が公爵家に嫁ぐ

際に国王が贈ったものだ。以来、公爵家は数十年に渡り、屋敷やしきを大切に使ってきた。

特に中庭の庭園は季節によって様々な色の花を咲かせており、どんな状況でも色褪いせることはなかった。庭園の中央には庭を見渡せるガーデンハウスが建てられ、白いラウンドテーブルと椅子が置かれていた。

かつてそこでは少年と少女が円卓会議えんたくを行い、意見を出し合い、議論し、この国の為に何をやるか、日が暮れるまで語り合っていた。

それが昨日のことのように蘇よみがえってくる。

「……姉上」

銀髪の青年はテーブルに置いた手を握り締め、唇を噛んだ。王太子から呼び出しの手紙が届けられたのはつい先程のことだ。青年の腕には髪と同じ色のプレスレットがはめられていた。

青年は踵かかとを返し、思い出の場所から離れた。

そこに笑い声が戻ってくることは二度とない。

たとえ、これが誰かの用意した筋書きだとしても、動き出してしまった歯車はもう止められなかった。

第二章 五年前の真実を求めて

ネオシイスト王国は国土の半分が海に面しており、通年穏やかな気候に恵まれている国だ。特産品には「人魚の涙」といわれる真珠があり、他国との貿易も盛んで資源豊富な発展国であった。

——しかし、それだけではない。

ネオシイスト王国には魔法が存在した。

王都の中央にそびえ立つ円柱の塔には巨大な魔法石が納められ、人々は石から力を借りて、生活に必要なだけの魔法を扱う。

人によって、魔法石から吸収できる力の量は異なっていた。許容量以上の大量の力を流し込むと体は耐えられなくなり、肉体は破裂してしまふ。

よって、人々は魔導師の作る魔道具に頼っていた。

魔導師とは、国が認可した職業の一つであり、様々な物質に魔力を付与することのできる者達のことだ。ネオシイスト王国にある身分に関係なく通える魔法学園には、魔導師に憧れた多くの学生

が学びにやって来るが、魔導師になれるのはほんの一握りしかない。魔導師は皆、魔法石から多くの力を引き出すことができる。

努力以上に才能が必要とされるのだ。

そんな魔導師たちが作った魔道具……自らの手首に付けたブレスレットを見て青年は溜息をついた。

謁見の間。

「ネオシイスト王国の若き太陽、王太子殿下にご挨拶申し上げます」

王座に国王の代理として座った男は、頭を下げる青年に向かって緋色の瞳を細め、口の端を持ち上げた。

青年がボルビアン国に滞在していた使節団と共にネオシイスト王国に向かうこと三日ばかり。

本来なら馬車で十日はかかるところを、馬を使わない魔道具の乗り物によって実に快適な旅路となった。予め訪問の知らせはしていたが、出迎えてくれたのは国王ではなく齢二十八の王太子だった。

「生憎、国王は公務で数カ月ほど城を空けている。私で失礼するぞ、ボルビアン国の」

「畏れ入ります」

王座に悠々と腰掛け、すでに一国の主の風格を纏った彼は、クロノス・フォン・ネオシイスト。王国が現在のような発展を遂げたのは彼の手腕だと言われている。黒髪に緋色の瞳をした美丈夫で、



細く見える肉体もよく見れば無駄のない筋肉がついていた。

「滞在中は自由に過ごしてくれ。必要なら案内人をやろう」

「お気遣い感謝致します、殿下」

ボルビアン国から訪れた青年はユリウス・ド・オグノア。王太子妃の弟で外交大臣の補佐官を務めている。前回の外交でジュリエナが犯した失態の正式な謝罪と、ネオシイスト王国の使節団が献上した魔道具の御礼が主な役割だった。

「我が国の魔道具はどうだった？」

「ええ、素晴らしい品でした。あれほど優れたものをネオシイスト王国では王族の方々だけではなく、裕福な方なら誰でも身に付けていると伺って驚きました」

「それだけ狙われやすいということだがな」

クロノスは茶目つ気たつぷりに片目を瞑って肩を竦めた。大国の王太子だが、なかなか気さくな男だ。だが、ユリウスは汗の滲んだ手を握り締めた。

「ああ、そういえば。そなたの姉君は息災か、オグノア殿」

「……」

突然の問い掛けにユリウスだけではなく、後ろに控えていた従者や護衛の騎士も僅かに息を呑んだ。クロノスは、果たしてどちらの姉のことを訊ねたのか。

いや、考えすぎか。

あれから五年も経っているのだ。

クロノスほどの立場の男が一度外交で訪れた程度の公爵令嬢を、覚えている筈がない。ユリウスは笑みを浮かべたまま、声が震えないように気を付けながら答えた。

「……冬季が近づいております故、体調を崩す者が増えて参りました。我が姉も現在療養中でございます。本日はこちらに赴けず、王太子妃に代わって重ね重ねお詫び致します」

「そうか、それは心配だな。ボルビアン国の冬はとくに厳しいと聞く。戻った際は早く良くなるよう願うと伝えてくれ」

「王太子殿下のお気遣い痛み入ります」

ユリウスは再び深く頭を下げ、ボルビアン国の者達と共に謁見の間を後にした。

国から持参した献上品も喜ばれ、用意された部屋に辿り着いた途端、額から汗が滝のように流れてきた。柔らかな笑みを浮かべていても、あの紅い目で捉えられると常に心臓を鷲掴みにされている気分だった。

倒れ込むようにしてソファアに座ると、部屋の扉が叩かれて二人の従者と騎士が入ってきた。

「よくやった、ユリウス」

「……エリオット殿下」

被っていたウィッグを外し、本来の姿に戻ったのは、ボルビアン国の王太子であるエリオットだ。隣の従者もまた変装を解いて、エリオットの側近であるハルミンが姿を見せる。そして護衛騎士と

してついてきたのはジークレイだ。

エリオットとハルミンは立場を偽ってネオシイスト王国に入国していた。他国の王太子ともなれば、自由に歩けるわけがない。

集まった彼らはお互いに顔を見合わせ、それぞれの意思を確認した。

今回の目的は別にある。

「セレンティーンの居場所は分かっている。ここはボルビアン国ではない、慎重に動こう」

エリオットの言葉に、他の三人は深く頷いた。



遡ること数日前。エリオットは秘密裏に、ボルビアン国から派遣する使節団に紛れて入国する準備を進めていた。

ハルミンは王太子自ら素性を隠して入国することに反対していたが、エリオットを止められないと悟ると自分も行くと言い出した。ジークレイに限っては、王族を守るのが使命だと言って今回の護衛に名乗りを上げてくれた。

ユリウスは実姉の冤罪の可能性を伝えられると、しばらく公爵家の銀水晶の宮に閉じ籠もり、姿を見せなくなった。だが、使節団へは必ず同行するだろうと確信があった。それまで落ち着く時間

が彼には必要だったのだ。

一方、エリオットはハルミンと計画を練りながら、王宮のとある部屋を訪れていた。

「……父上、ご報告がございます」

病に臥した国王の元に足を運ぶ。

ベッドから起き上がって食事を済ませた父親の顔色はいつもより良かった。

ただ、寝たきりのせいで頬は瘦け、体は一回りも小さくなってしまっている。黄金色の髪も白くなり、一気に年老いてしまったようだ。最愛の王妃を失ってから氣力を失った国王は、日に日に弱っていった。

それでも息子として、王太子として、責任のあるエリオットは身に起きたことを包み隠さず話さなければいけなかった。

「……なんと、いうことを」

国王は、魔道具のプレスレットを付けた左手で顔を覆った。口からは悲痛な呻きが漏れ、エリオットは直視できなかった。

小さい頃から息子と共に育ってきたセレンティイヌは、国王にとって我が子同然だった。また娘が欲しかった王妃は彼女の両親以上に彼女を溺愛し、可愛がっていた。本当の娘になるまであと少しだったのに、全てが一変した。

王妃はセレンティイヌの無実を証明しようと動いていたが、大勢の前で断罪される彼女を庇うこ

とができなかった。それは国王に対する反逆を意味する。娘のような存在を失い、王妃は嘆き悲しみ、倒れてそのまま回復せずに亡くなった。

オグノ公爵夫妻は娘の責任を取る形で、ジュリエナを公爵家に養女として迎えたが、世間からの糾弾や嫌がらせが絶えず領地に引き籠もってしまった。

エリオットから話を聞いた国王は声を震わせ、王妃の名前を口にした。魅了という呪いに掛かっていなければ失わずに済んだ最愛の妻だ。

「……それで、隣国に行くのか」

「ええ、素性を隠して入国するつもりです」

「そうか。……リオルはどうした」

「信頼できる女官と侍女に預けております」

急に息子の名前を出されて、エリオットは僅かに眉根を寄せた。

まだ幼い息子は突然母親に会えなくなつて何度も泣き喚いた。どんなに言い聞かせてもまだ理解することはできないだろう。

エリオットもまた、自分の気持ちに整理がついていなかった。

唯一の我が子なのに、あれから抱き上げたくても手が止まってしまう。泣いている息子を抱き締めて慰めてやりたいのに、体が拒否するのだ。

「もし、セレンティイヌと再会できたら……」

「ええ」

「……すまなかった、と」

国王が民に頭を下げることはない。

けれど、エリオットを通して、追放してしまった彼女に謝罪してきた。エリオットは「必ずお伝えします」と約束した。

「お前が国を離れている間、私が留守を預かろう。いつまでも臥せっている場合ではないな」

「どうか、ご無理はなさらずに」

「大事な。——頼んだぞ」

国王の伸びてきた手が、エリオットの肩を掴んで揺らした。

弱い力だった。それでも父親の思いを受け取り、エリオットは数日後に従者として旅立った。



セレンティーンヌが隣にすることは、エリオットにとって日常だった。

初めて出会った瞬間も思い出せないぐらい、気づけば誰より近くにいた。お互い、婚約者として特別意識したことはない。関係を定める必要もないぐらい好き合っていたからだ。

「エリオット！」

王宮と公爵家の邸宅は馬車で二十分足らずの距離にあった。

おかげで、二人はほぼ毎日のように行き来して相手の家に転がり込んでいた。まるで我が家に帰る感覚で足を運んでいるせいか、護衛や侍女を置き去りにして部屋に駆け込んでくることも日常茶飯事だ。

「……セレンティーンヌ、女の子が扉を勢いよく押し開けるなんて、はしたないよ？」

「一昨日も同じことを言われた気がするわ」

「そういう記憶力は良いのね」

柔らかくウェーブのかかった銀色の髪を揺らし、長い睫毛の下に収まった青灰色の大きな瞳を輝かせてやって来たのは、もちろん婚約者である少女だ。

彼女の髪や瞳の色に合わせた青いドレスは、生地が左右に開かれて後ろで括られ、水色のフリルがあしらわれたアンダースカートが足元を隠していた。社交界で流行りの形だというドレスは、婚約者をより愛らしく引き立ててくれている。

部屋で勉強をしていたエリオットは、開いていた本から視線を持ち上げてやって来た婚約者に肩を竦めた。少し遅れて、無事彼女の護衛が追いついたようだ。

「また隠し通路を使ったね？」

「えーと、どうだったかしら」

本来なら十歳の子供の足で護衛をまくことは不可能だ。それなのに、セレンティーンヌは毎度のこ

とながら一人で颯爽と現れる。

答えは簡単だ。彼女は王宮の隠された通路という通路をエリオットなみに知り尽くしているのだ。小さい時からエリオットと共に冒険ごっこをしたのが原因だ。本来は王族しか知らない通路であるというのに。そういう意味でも、エリオットの婚約者はオグノア公爵家の令嬢、セレンティーヌ以外いないのである。

「あのね……ティヌ」

これはもう一度よく言い聞かせないといけない、と本を閉じたエリオットは椅子から立ちあがりセレンティーヌに近づいた。安全な王宮内とはいえ、何かあってからでは遅い。婚約者である前に一国の王子として対処するべきだ。

「なあに？」

「——っ、なんでも、ない……」

意気込んで向かい合ったものの、二人でいる時だけ使う愛称を口にしながらいけなかったようだ。セレンティーヌは嬉しそうに青灰色の目を輝かせて、子犬のように小さく首を傾げた。その愛らしさに、エリオットの威厳は容易く崩れ落ちた。

一瞬、息を切らした護衛の騎士と目が合ったが、その顔は悲愴感が漂っていた。王子も婚約者の前では形無しだと噂が広がってしまったわな心配になる。

エリオットは誤魔化すように咳払いし、セレンティーヌに向き直った。

「と、ところで、今日はそんなに急いでどうしたの？」

「ふふ、これを見て。王妃様からお茶会の招待状が届いたの」

輝いていた瞳をさらに光らせ、セレンティーヌは持っていた白い封筒を差し出してきた。封蝋には王室の印璽が押されていた。

セレンティーヌは興奮冷めやらぬ様子でエリオットの手を掴み、二人は並んでソファに座った。

「そうか、来月だったね」

二人が座ってから間もなく、侍女がお茶やお菓子を運んできた。

テーブルにはセレンティーヌの大好きなお菓子ばかりが置かれていく。どうしてかって、見ていれば嫌でも分かる。

セレンティーヌは、お茶を用意してくれた侍女に向かって「ありがとう、美味しくいただくわね！」と飾らない笑顔でお礼を言い、侍女は感動して目を潤ませるのだ。

こうしてまた一人、婚約者を崇拜する者ができた。王宮の侍女はすでに掌握されていると思つて間違いない。エリオットは好物のクッキーを頬張るセレンティーヌに嘆息した。

「私達と同じ年ぐらいの子供を集めてのお茶会なんて楽しみだわ！」

「浮気なんかしちゃダメだよ？」

侍女とのやり取りを見ると、セレンティーヌにそのつもりがなくても相手は勘違いしてしまうようだ。先が思いやられると首を振って見せれば、セレンティーヌは唇を尖らせた。

「そういうエリオットこそ」

普通なら恥ずかしくなるような会話も、二人はまるで違っていた。一瞬、浮気をする自分たちを想像してみるが、思い描くことすらできず、どちらも「ないね」「ないわね」と呟いて頷いた。

「そういえば母上が、ティヌのドレスを仕立てるって張り切ってたよ」

「逆に、私のお母様は機会を奪われて嘆いてたわ」

「……程々にするように言っておくよ」

王妃であるエリオットの母親はエリオットを産んだ後、子供をなさなかった。正確には腹に宿っても産声をあげることはなかった。今は子供ができる体ではなくなってしまい、一度だけ声を殺して泣いている母親を見たことがある。

考えられる理由は王と王妃がいとこ同士で、流れている血が近いせいだろうと言われている。

ボルビアン国のように閉鎖的な国は他国の血を受け入れない。

王室も近い者同士で婚姻を繰り返し、生まれる子供の数は年々減少してきている。まだ成人にもなっていないエリオットの耳にも入ってくるほどの話だ。貴族の大半は王族と血の繋がりがあると言っている。

だから、息子一人しかいない王妃は、息子の婚約者であり赤子の頃から見てきたセレンティーンをととても可愛がっていた。それはセレンティーンも理解しており、楽しそうにドレスを準備してくれる王妃に何も言えないでいるのだ。

「きつとエリオットとお揃いの色に仕立てあげるつもりだわ。それじゃ浮気どころか他の男の子と話もできないわね」

「全身で僕の婚約者ですって言いながら歩いてるようなものだね」

「あら、私は全然平気よ？　むしろ嬉しいわ」

「君はもう少し自重したほうが良いよ……」

茶化すわけでもなく至極真面目な顔で言ってきたセレンティーンに、エリオットは肩を落とした。「僕の心臓がいくつあっても足りない」と呟けば、セレンティーンはにこにこ笑って二人の間にあった距離を一気に詰めてきた。

ほら、浮気なんて絶対できない。エリオットの心は婚約者への愛でいっぱいになってしまふ。

「エリオットは、このお茶会でとくに挨拶しておきたい人っている？」

「うん、いるよ」

触れたところから伝わってくるセレンティーンの体温にドキキしながら、エリオットは頷いた。招待状には招待客のリストが入っているわけじゃない。だが、エリオットは母親から誰と会って、誰と挨拶しておいたほうがいいか予め教えられていた。

「騎士団総長のご子息が僕たちと同じ年なんだ」

「キャスナー伯爵家ね」

国を守る騎士団は、多くの人々に憧れられている。彼らに憧れて騎士を目指す男児からはもちろ

ん、淑女からも人気が高い。

剣を掲げて王に忠誠を誓う式典は、毎年の恒例行事となっており、多くの民が王室の広場に押し掛けて見物するぐらいだ。騎士たちが式典用の隊服に身を包み、一糸乱れず行進して剣を抜く姿は感動して込み上げてくるものがある。

「キャスナー伯爵家は代々決まって赤い髪だからすぐに見つかりそうね」

「彼にも幼馴染みの婚約者がいるって言ってたから、ティヌも挨拶しに行こう」

「分かったわ。彼も騎士を目指しているなら、将来私達とも関わってくるでしょうし」

王室と騎士団は深い繋がりがある。歴史を辿っても建国から王室を支え、小さなボルビアン国を他国から守り、争いのない穏やかな国にしてくれた組織だ。

だから、今も行われる騎士団の式典は平和の象徴でもあった。

エリオットはセレンティーンの言葉に口元を緩ませ、笑顔で頷いた。直後、セレンティーンが「わ、私の心臓が……」と胸を押さえたのは見なかったことにしよう。

「それから、ハルにも良い子を見つけてあげないと」

「彼、嫌がると思うわ」

「そうかな？」

エリオットは親友にも早く素敵な相手が見つかるように願っているのだが、セレンティーンは首を振って止めた。

「ハルミンには、彼のタイミングで良い人が現れる筈よ」

自分たちが幸せなせいか、身近にいる人も同じように誰かと幸せになってほしいと思ってしまっけれど、相手のことも考えなければいけないと気づいて反省した。

エリオットはセレンティーンの手を握り締め、銀色の髪に頭を押し当てた。

「そうだね」

エリオットにとって、セレンティーンと一緒に過ごす時間は至福だった。

自分たちは誰もが羨むような夫婦になって死別するまで離れずにいる——ものだと思っていた。

——通い始めた学園で、下級貴族の令嬢と出会うまでは。

「エリオット様……！」

彼女は婚約者とは違い、教養もなければマナーも身に付いていない男爵令嬢だった。最初は興味も抱けなかった。それが、鉢合わせるが増え、何度も顔を合わせている内に本音を零すようになっていた。

——不思議だった。